巨乳
令嬢MC
学園
布施はるか
PBオトナ文庫

巨乳令嬢MC学園

著：布施はるか
画：スカイハウス
原作：ルネ

PBオトナ文庫

プロローグ　屈辱のSC（スクールカースト）

「うあっ!?」

池ノ上拓海は、思わず声をあげていた。いきなり突き飛ばされて教室の床の上へ仰向けに倒れ込んだ直後、ことともあろうか股間を踏みつけにされたのだ。それも、革靴で。

「クックッ。ほおら、グリグリ♪　……っと」

意地悪く笑って拓海を踏みつけにしているのは、クラスメートの神泉理央。カリスマ的なグラビアアイドルでもある美少女だ。そんな彼女に、制服のズボン越しにイチモツを踏み躙られている。執拗に刺激で、拓海の呼吸は止まりそうになった。

昼休みになったばかりの教室には多くのクラスメートがいたが、誰も理央を止めようとはしない。国内屈指の名家の一員でクラスのリーダー的存在・吉祥寺アリサや、アリサの幼馴染にして風紀委員・久我友里子も、拓海に蔑みの視線を投げるだけだ。

ただひとり、福永こはるだけが、オロオロした様子で心配そうに拓海を見つめている。

なぜ拓海がこんな目に遭っているのか？　それは、四時限目の授業が終わり、教師が教室から去ったあと、アリサと友里子からあら ぬ因縁をつけられたことに始まった。

ふたりに侮蔑され、周囲からも嘲笑されて落ち込んでいると、唯一の味方とも言えるこ

プロローグ　屈辱のSC（スクールカースト）　5
第一章　逆襲のMC（マインドコントロール）　15
第二章　淫らにUC（アンターコントロール）　117
第三章　巨乳令嬢MC学園　189
エピローグ　支配者のEC（エンドクレジット）　266

池ノ上 拓海 *Takumi Ihenoue*

もとは女子校だった王立学園に唯一入学してきた男子。特別奨学枠の試験を勝ち抜いたわりには特に秀でた面もなく、女子運から見放され、暗澹な日々を送っている。

神泉 理央 *Rio Kamiizumi*

B：88cm（F）
W：58cm
H：87cm

幼少期からモデルとして活躍しており、学園内に取り巻きがいるほどの人気者。軽い見た目に反し計算高いところもある。唯一の男子学生である拓海を、ことあるごとに虐めている。

吉祥寺 アリサ *Arisa Kisshouji*

B：93cm（G）
W：59cm
H：85cm

学園を運営する吉祥寺家の娘で才色兼備のカリスマ的存在だが、姦の子であるため父親からは見下されている。MC効果のあるオルゴールを使い、水面下で学園支配体制を築きつつある。

福永 こはる *Koharu Fukunaga*

B：104cm（I）
W：62cm
H：92cm

主張の激しいバストとは裏腹に、引っ込み思案で優しい心をもつ少女。学園内で唯一拓海に対して同情的だが、積極的にかばうことはできず、誰も見ていないところで声をかけてくる。

久我 友里子 *Yuriko Kuga*

B：95cm（G）
W：60cm
H：91cm

吉祥寺家に代々仕える家の娘で、アリサとは幼なじみの親友であり、学園支配を陰で支える忠実な部下でもある。文武両道かつ生真面目な性格から、学園では風紀委員を務めている。

はるが慰めてくれた。そこでつい、彼女の僅乳に見惚れてしまったのがいけなかった。

拓海の視線の先に目聡く気づいた理央が、それをネタに難癖をつけてきたのだ。日頃から何かにつけて拓海をいびる理央は、拓海の出来心をことさらに責め、言い逃れしようとする彼を「ここに証拠があるじゃんよ！」と突き飛ばして、今のこの状況がある。

「あれれ～？　何よ、これ？　硬くなりかけてるじゃん？　ん？」

狙いを定めてグイグイ踏み込まれると、拓海のペニスは純い痛みを感じつつも少しずつ頭をもたげていく。哀しいかな、思春期男子の股間は理性に反して無節操に反応してしまう。そうでなくとも、拓海の視界の中には発育のいい美少女しかいない。制服のプリーツスカートから伸びる太腿や、ブレザーの胸部に描かれる豊かな曲線は、彼のクラスだけでなく学園のどこででも拝むことができる。この私立・王京学園に在籍する男子は拓海ひとりきりなのだ。だからだろうか、入学から今日まで、拓海は文字どおりの異分子として誰よりも格下に扱われてきた。入学を許可した学園側、教師達も見て見ぬふり。むろん、拓海への陰湿なイジメは教師の前では行われない。拓海以外の生徒は皆、それなりに裕福な家庭のお嬢様である。学業優秀で品行方正な少女達ばかりなのだ。表の顔は……。

「や、やめ……」

「おっと！　なに勝手に脚閉じようとしてんのさ？　じっとしてないと潰しちまうよ!!」

ビシャリと投げつけられた強い口調。同時に、革靴の踵が陰嚢を圧迫する。本気としか思えない理央の言動に抵抗の意思を奪われ、拓海は息を呑んで口を噤み、身を固くした。

「フフッ。そうそう。おとなしくしてりゃ、そこまで悪くはしないからさ♪」

ニヤニヤと笑う理央が、わずかに踵を上げる。陰嚢への圧力が弱まり、睾丸を踏み潰される恐怖からはどうにか解放された。しかし、依然としてペニスを踏まれている状況に変わりはない。事実、理央が面白半分に靴先を動かしてくる。

「ほらほら～。どういうことかな～、これ？　また大きくなりかけてな～い？」

「（そんなことない）って？　へぇー。だったら、これはどうなのかなー？」

理央は靴の土踏まずに陰嚢を収めると、靴底全体を使って拓海の股間を揺さぶった。

「は……!!　んんっ！　くぅっ。う……、あぁぁ……」

巣らず、情けない声をあげて身悶える拓海。無節操な股間の分身はギンギンである。

「うわっ？　マジ、勃起してるでしょ、これ。池ノ上、もしかして普段から結構強めにシコってる？」

理央の口から飛びだした、品行方正なお嬢様でカリスマアイドルとは思えぬ下品なセリフ。だが、周囲の女子が頬を緩めたのは、理央にではなく、拓海に対してだった。

「シコ……？　やだ……。なに考えてるのかしら……？」

「でも、きっとそうなんだわ……。そういう顔してるもの……」

理不尽な嫌悪を一身に浴びても、勃起したイチモツの裏スジをズボン越しに擦られ続ける拓海には言い返す余裕がない。それどころか……。

「ほら、ここっしょ。うわっ？　メッチャ、カチカチになってきてんの！」

「く……!!　うぅぅ……。あっ！　や……めて！　く……、うぅぅっ！」

理央の力加減は恐ろしいほどに絶妙だった。まるで、どこを刺激すれば体がどう反応するのか理解しているような動きだ。

「ズボンの上からでも、フツーにバレてるし。ほれほれ、この膨らみ！」

靴先でズリズリ擦られ、ズボンの生地にイチモツの形がクッキリと浮き上がる。

「やだ……。なに、アレ……!!　気持ち悪い……！」

「こんなところで……!!　ヘンタイ……！　正気なの……？」

グロテスクなシルエットを目の当たりにして、周囲のざわめきが増した。

「フフッ。聞いた？（ヘンタイ）だってさ。凄いこと言われちゃってるねぇ。でも、ＦＭの池ノ上にはご褒美なんでしょ？　クラスメートの前でシコられてさ」

拓海はマゾではない。なのに、ギュッと押し込まれた股間の中心に、言葉にできない熱を感じている。それを意識すると余計に体が熱くなり、慌てて否定の言葉を口にする。

「あうっ。な……！　そんな……ことぉ……」

口で（違う）って言っても、チンポは正直なんだよっ。なんだよ、このガチ勃起！」

惨めな獲物を嬲りつつ、理央が果猥な単語を含んだ怒声を放った。

拓海を遠巻きにして見下ろすクラスメートの中には、アリサと友里子もいる。今この瞬間こそ、まさしくクラスの風紀が乱れている状況である。ことあるごとに拓海を風紀を乱す根源のように扱うふたりだが、なぜか理央の行為を制止することはなく、冷ややかな視線のまま、無様な男子の姿を眺めている。

ふたりから少し離れた隅には、困ったような表情を浮かべるこはるの顔も見えた。いつも、それとなく拓海を気にかけて慰めてくれる優しい少女。そんな彼女の僅乳に果猥な視線を送ってしまったのは事実だ。こはるは顔を赤らめながらも顔を背けずにいる。彼女には、今の拓海はいったいどんなふうに見えているのだろうか？

こんな情けない姿を皆に見られている。そう意識すればするほど、拓海の股間には大量の血流が集まり、鈍い痺れをともなってイチモツが脈打った。

「なーに、キョロキョロしてんのさ？　もっと集中したらどうなん？」

再びギュッと陰茎を踏まれ、拓海の体が堪らず跳ね上がる。

「あぎっ!!」

「アハッ♪（あぎっ!!）だって。いい声出せんじゃん。ほれ、もっと鳴いてみなよ！」

軽快にステップを踏むがごとく、理央が小刻みに何度も踏みつけてくる。

「ま……！　やっ、め……!!　あぐっ!!　あっ、あぁ……！　うは……！　んうっ!!」

完全に勃起したイチモツをガクガクと揺さぶられる。だが、その屈辱的な体勢でもたらされる刺激は、単なる苦痛だけではなかった。声を出すまいと堪えるほどに、股間の中心から強い疼きが広がり、情けない息が洩れる。

「フフッ。苦しい？　じゃ……、ちょっとだけ、加減してあげよっか」

不意にスッと刺激が弱くなった。だが、安堵するには早すぎる。未だしっかりとイチモツを捉えている靴先の恐怖が拓海の心を支配しており、理央がまたもやグイッと力を加えて踏みつけてくる。

「あ……!?　んくっ……。あ、ふ……」

「なぁんだ、まだやる気あるんじゃん♪　もしかして最後までイッちゃいたいってこと？　ほれほれ、どーよ？　女子にチンポ踏まれてコーフンしてんでしょ？　んん？」

「そんな……ことは……、あっ!?　やめ……」

「なに、女みたいな声させて？　キャハッ！　キモすぎでしょ!!」

以前から何かとちょっかいを出してきた理央だったが、こんなことは初めてだった。あたかもスイッチが入ってしまったかのごとく、行為をエスカレートさせていく。

「どこが一番感じるのかな～？　先っぽかと思ったけど、案外根もとによかったり？」

直後、革靴の硬い先端が陰茎の根もとにグリグリと押しつけられた。

「うくっ!?」

「おっ？　跳ねる跳ねる♪　なら、この辺も続けてっと……」

今度は踵で根もとを踏みつけ、そのまま靴先で裏スジを捏ねまわす。

「ひ……!?　ほ……、本当に……、それ以上は……！　ひっ!?　ああっ!?」

必死で制止を訴えようとする拓海だったが、ひっきりなしに訪れる刺激のせいでうまく言葉にできない。目の奥がチカチカしだしていた。

「フフッ。タマも震えてんの？　こーいうのが好きなんだ？」

陰茎への刺激が続いていたところに、不意打ちのようにズンと睾丸に衝撃が疾った。無防備だった陰囊を理央が踵で叩いたのだ。

「くおうっ!?　はっ、あ……。ぐっ！　はぁあっ。は……、はぐっ。あぁぁ……」

目の奥のチカチカは激しい火花に変わっていた。どうしようもない心細さと、体の奥から湧き上がる焦燥感が拓海を翻弄する。

「うっ!?　あっ、あっ、あぁ……！」

「おんやー？　何か、アレっぽい声がするんですけどー？　どうなってんのぉ？」

「だっ、だから……、くっ!?　あっ、の……、やめ……、も、もうっ！」

「（もう……）何かな～？」

「くぁ……！　あっ、うっ」

拓海は焦った。これ以上されては、本当に

射精してしまう。けれど、その言葉を口にすることができなかった。クラスメートのほとんどがいる場で、大勢の女子の前で「射精する」だの「出る」だのと言える度胸は拓海にはない。まして、そんなことを口走ろうものなら、また何を言われるかわからない。その恐怖がもたらすためらいは、しかし結果的に拓海をさらなる窮地へと追い込んでしまう。

「（あっ、うっ）じゃ、わかんないってーの。ほららっ。なんとか言ってみろっての！」

グッと盛り上がったズボンの重がひときわ強く押し込まれた、その刹那。

「ひっ!?　う……あ……！」

目の奥の火花が盛大に弾け、腰の踏ん張りが完全に崩壊する。「しまった！」と思った時には、もう完全に手遅れだった。鈍い痺れが下腹部に疾り、決壊の感覚が全身に広がった。肉棒がビクンと脈打ち、ズボンの股間にジワリと染みが浮かぶ。

「えっ？　ちょっと、マジ？　お前、ガチでシャセーしてんの？」

目を丸くした理央が驚きの声をあげた。それを耳にした途端、拓海はとり返しのつかないことをしたと自覚させられたが、もはや射精を止める術はない。

「あ……、あぁぁ……」

ブルッと膝手に腰が震え、陰茎が力強い脈動を繰り返す。立て続けに味わう爆発的な解放感は、我慢に我慢を重ねた末にようやく排尿できた安堵感に似ていた。いや、本当に失禁してしまったのではと疑いたくなるほど、射精の勢いは激しく大量だ。ますます大きくなる股間の染みを、遠巻きにしていた女子達が固唾を飲んで見つめていた。突き刺さるようないくつもの視線に、どうしようもない羞恥をさらしてしまったことを、嫌というほど思い知らされる。拓海の頬はカッと熱くなり、目の端から涙がこぼれた。

やがて、快感の波が退くと、あとにはねっとりとした不快感だけが残される。

「ハッ！　染みになってきてるじゃん！　ヤベー。これ、精汚れちゃうし！」

小さな悲鳴が謎のように湧き起こる教室で、顔を紅潮させた理央がケラケラと笑った。

「まさか、本当に出すなんて……」

「不潔ですね……」

悠然と一部始終を眺めていたアリサと友里子も、なかば驚きの表情とともに顔を顰め、より深い嫌悪の視線で拓海を見下ろしていた。

拓海にとって何よりもつらかったのは、涙で滲む視界の中で、顔を赤くさせながら目を逸らすこはるの姿を見てしまったことだ。密かに気遣いを見せてくれた唯一の味方である少女の前で、邪な欲望の証を暴露させられてしまった。どれだけ言い訳しようとも、快感を得て、我慢できずに衆目の前で射精してしまった事実は変えられない。

「ねー？　これ、なに？　プブッ。なに出してんの？　マゾなの？　ヘンタイなの？」

なおも股間を踏みつけながら、理央がせせら笑った。

「信じられない……。どういう神経してるのかしら……？」

「だから男なんて……。なんでウチのクラスなのかしら……？」

周囲の女子から、これまで以上に辛辣な嫌悪と軽蔑が投げつけられる。いつもは助け舟

を出してくれることはるでさえ、視線を逸らして何も言ってくれない。

「う……、うあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

やりきれない思いを爆発させた拓海は、情けなさと悔しさをバネに理央の足を押し退けて飛び起きると、そのまま教室を飛びだした。昼休みで賑わう廊下をもがくように走りながら、熱を失い冷たくなっていく不快な感触を意識して、また涙をこぼす。耳の奥には、ヒソヒソと交わされるクラスメートの執拗な陰口がこびりついていて離れなかった。

第一章 逆襲のMC（マインドコントロール）

夕方、学園中庭の隅にあるベンチに座り、拓海はひとりため息をつく。

昼休みに醜態をさらしたあと、午後の授業をサボって男子トイレに籠った。下着とズボンを洗い、肌に付着した粘液を拭ったが、まだ少し不快感が残っている。季節は春、新学期が始まってから一週間も経っていない頃、水洗いした下着とズボンはなかなか乾かず、クラスメート達の前で射精してしまったショックからも立ち直れていない。

今もジクジクと心を苛む恥ずかしさや情けなさといった感情が、頭の中をグルグルまわり、目眩がした。焦点が定まらない瞳でぼんやりと足もとを見つめ、拓海は考える。逃げてしまえるのなら、とり返しがつかなくなる前に逃げてしまえばよかったのだ。今さら後悔しても仕方ないが、あの時は〈逃げる〉という発想にまったく辿り着かなかった。

私立・王京学園は、もともと由緒正しい名家の淑女が通う全寮制の女子校だった。しかし、少子化の折に加え、理事長交代による方針転換により、大きな転機を迎える。それこそが〈男子生徒の受け入れ〉という、およそ半世紀以上に亘る学園の歴史を塗り替えての新たな改革だった。伝統を重んじるといえばいいが、時として時代錯誤な閉塞感があると揶揄されることもある学風に対し、以前から「今の時代にそぐわないのでは？」と

いう声が囁かれていた。それだけに、〈新しい血を入れる〉という思いきった試みは、発表時にはそれなりに世間を騒がせたものだ。

とはいえ、それは拓海とは縁のない世界での話。そう思っていた矢先に、唐突に舞い込んできたのが、ほかならぬ王京学園の特別奨学枠についての知らせだった。

幼い頃の両親の離婚によって父子家庭で育った拓海は、仕事人間の父とあまりいい関係を築けずにいた。特別成績がよいわけではなく、部活で何か実績を挙げているわけでもない拓海は、将来の進路について思い悩んでいた。学生時代は常にトップを競っていたという父に比べ、拓海は平々凡々とした数字を残すのが精いっぱい。そのことで父から何かを言われた記憶はないが、時々交わす父子の会話に、拓海はどこか居心地の悪さ……、言葉にしがたい息苦しさを感じていたのは確かだった。たとえ言葉には出さずとも、ひとり息子に求める結果の最低限が自然と高くなっていた。少なくとも、拓海はそう感じていた。

だから拓海は、担任教師からもたらされた王京学園への特別奨学枠の話に飛びついた。新たな環境への挑戦を謳い、来年度から新入学の男子を受け入れるという王京学園の案内は、まさしく渡りに船。学園は全寮制なので卒業するまで親もとを離れて暮らすことができるし、名門お嬢様校として知られていた王京学園ならば父の体面も保てる。そう考えてのことだ。不安や懸念がなかったわけではない。なんら取柄のない平凡な自分が、そもそも学園に入学できるものなのか？　なんとか入学できたとして、その先、卒業までちゃんとやっていけるのか？　けれど、環境に変化を与えたいという強い気持ちが拓海の背中

を大きく押し、父もそれを汲んでくれた。加えて、元女子校という圧倒的に女子が多いだろう学園の中で、甘酸っぱい青春が送れるかもしれないという淡い期待もあった。

特別奨学枠による入試は、軽い面接と、予想より遙かに簡単な学力テストのみだった。それらを終え、無事に合格を決めて喜んだのも束の間、入学を果たした男子は、なぜか拓海ひとり。奨学枠について確かめる術など拓海にはなく、学園唯一の男子生徒という立場に待っていたものは、先輩となる在校生や同期の新入生からの好奇……、いいや、奇異の眼差し。そして何よりも、閉ざされた女社会の持つ深い闇の世界だった。それは、拓海が最上級生となった今も変わっていない。

「どうして、こんなことになっちゃったんだろう……？」

力なく呟いて、拓海は再びため息をついた。

共学化にともなって設けられた数少ない男子トイレは、さすがに女子が入ってくることもなく、校舎内における拓海の安息の地であった。だが、ずっと留まれるわけもなく、結果、拓海は巡り巡って中庭まで来てしまった。寮に戻り、食堂の片隅で食事をとって部屋に籠るまで、また女子達からの厳しい視線にさらされなくてはならない。それがどうにも憂鬱で、普段からひとりの少ないこの場所で無為の時間を過ごしている。

「特別奨学枠という言葉に誘われて進路を決定したのは、ほかならない僕だけど……。まさか、その特別奨学枠が男としてただひとりだったとは思わなかったな。そもそも、なんで僕だったんだろう……？」

最初から拓海以外の応募がなかったのではない。その証拠に、面接も学力テストも拓海は他校の複数の男子と一緒に受けたのだ。彼らが落とされて拓海ひとりが残った理由が成績によるものだったとは考えにくかった。実際、入学以来の拓海の成績は、授業についていけないというほどではないものの、下から数えたほうが早い程度である。

「理由なんて、誰も教えてくれないし……」

入学後、担任教師に「なぜ自分が選ばれたのか？」と訊いたことがあったが、「理事長の決定です」ということ以外に回答はなく、理事長への面談を頼んでみても「生徒ひとりにとれる時間はない」と門前払いだった。

「このまま、卒業までずっとこんな重苦しい状態が続くんだろうか……？」

考えるだけで気が滅入り、深いため息を吐きだすばかり。すると、不意にベンチのうしろから声をかけられる。

「あ……。ここにいたんだ……」

「え……？　あっ！　ふ、福永さんっ!?」

ビクリと腰を浮かせて振り向いた先にいたのは、福永こはるだった。

「あ……。ゴメンっ。驚かせ……ちゃった……？」

「あ……。いや、そ、そんなことは……ない、けど……」

昼休みの記憶が蘇り、拓海はわずかに頬を引き攣らせる。一方、こはるも拓海の態度で彼の心中を察したらしく、多少頬を赤らめた。それでも、こはるは拓海へと歩み寄る。

「えと……、よかったら、隣……いい？」

「え……？　あ……。ああっ。うん。その……、どうぞ……」

「ありがと。じゃ……、ちょっとだけお邪魔します」

そう言うと、こはるが制服の胸を揺らして拓海の隣にちょこんと腰かけた。

拓海は、どう接したらいいのかわからない。視界の隅にある豊かな胸の膨らみに気をとられるのも論外である。拓海は俯くしかなかった。隣のこはるはこはるで、拓海に顔を向けることなく、足もとに視線を落としている。そのまま、しばし訪れる沈黙。互いに俯くふたりの間に漂う妙な緊張感。それを払ったのは、こはるだった。

「あ、あのね？　気にすること、ないと思う……。つまりその……、昼間のこと……」

こはるは頬を染め、さも申し訳なさそうにうな垂れた。

「本当に……、ごめんなさい。わたし……、何もしてあげられなくて……。本当なら、誰かが止めなくちゃいけないことなのに……、わたし……」

「あっ。そ、そんな……！　福永さんは全然悪くないよ！　その気持ちだけで充分だよ。だいたい、あんなところで僕なんか庇ったら、今度は福永さんが何をされるか……」

「それでも、わたし……、おかしいと思うし……」

その言葉だけで、拓海の心はどれほど安らいだことか。何よりも、こはるは拓海を軽蔑してはいなかった。彼女の爆乳を見て拓海が密かに興奮を募らせていたと知っても、無様に射精した姿を目の当たりにしても、変わらずに心配してくれているのだ。まったく味方

のいない学園内で、こはるだけが優しい言葉をかけて自分にできる精いっぱいの気持ちで慰めてくれる。拓海は、かねてから気になっていたことを口にした。

「福永さん……。あの……、あのさ。どうして、そんなに僕に優しくしてくれるの？」

「え……？　どうしてって……」

問われたこはるは、ふと拓海に顔を向けたものの、すぐに困った様子で顔を逸らしてしまう。口籠る横顔は、心なしか赤くなったようにも見えた。

拓海はドキリとした。こはるの態度が、好意の表れであり、テレ隠しに思えたからだ。

拓海のことが好きだから、何かと気を配ってくれている。そう考えれば、わざわざ拓海を探して謝罪してくれたことにも納得のいく説明がつく。いいや、そうでもなければ説明がつかない。拓海の心は躍った。こはるのような優しい少女が恋人として傍にいてくれるなら、この学園での生活も楽しくなるかもしれない。

逸る気持ちを抑えきれないまま、拓海はこはるへと向き直る。

「あの……さ、福永さん」

「うん。なに？」

「その……、僕も……、福永さんと同じ気持ち……かも……」

キョトンとしたこはるが「え……？　同じ……って？」と拓海の顔を見つめた。

「だから……、その……、なんとなく福永さんのことが気になる……って言うか……。気がついたら、自然に目で追っちゃうって言うか……。これってもしかして……、す……、

好き……ってことなのかな……って……」

「え……？　あ、あの……」

いっそう目を丸くするこはるを、拓海はじっと見つめ返す。

「も、もし福永さんさえよければ……、僕……、その、福永さんと……」

けれど、拓海がその先を告げる前に、こはるは慌ててベンチから腰を上げた。

「ちょっと待って、池ノ上くん。わたしはべつに、そういうつもりじゃ……」

「え……？」

「わたしは、アリサさんに〔困った人がいたら気遣ってあげてくれ〕って言われて……、なんとなくそうしなきゃって気がしただけで……」

〈アリサ〉とは、クラスのリーダー・吉祥寺アリサだろう。唐突とする拓海に、こはるはなおも言う。

「だから、その……、池ノ上くんの気持ちとはちょっと違うって言うか……。ご、ごめんなさいっ！」

巨大な胸をユサリと揺らし、こはるは頭を下げた。そこで拓海は我に返る。

「あ……。う、ううん。ゴ、ゴメン……。なんだか変なこと言っちゃって……」

「ううん……。あの、思ったより元気そうでよかった。じゃあ、わたし、もう行くから」

言うが早いか、こはるはクルリと踵を返して走り去ってしまう。そのうしろ姿を、ただただ見送ることしかできない拓海だった。

やがて、こはるの姿が見えなくなると、拓海は何度目かの深いため息をつく。

「バカ……。僕って奴は、どうして……！　そんな調子に乗って……」

自分勝手な思い込みに舞い上がって告白し、ものの見事に玉砕した。しかも、まったく脈のない完全な拒絶を示されて。お蔭で、失恋の落ち込みよりも自分のマヌケさを恥じる気持ちのほうが強い。

拓海は大きくかぶりを振って気持ちを切り替え、こはるの言葉を思い返した。

「けど、〈吉祥寺さんに……？〈気遣ってあげてくれ〉？　なんだよ、それ……？　もとはと言えば、吉祥寺さんが今の状態にしたくせに……」

拓海には、わけがわからない。ただひとつ確かなことは、こはるには本当に同情心しかなかったということだ。一度答えを迫ってしまった以上、もうそれが覆されることなどありはしない。灯されると思った光は再び闇に呑み込まれ、深い絶望の中に沈んでいく。

「もう嫌だ。こんな学校……。来なけりゃよかった……」

いっそ、辞めてやろうか。そんなことも思ってみたが、特別奨学枠で名門校に入学しておきながら途中で自主退学したとなれば、どうしたところで問題児のレッテルを貼られてしまう。そうなれば将来の展望……、進学も就職も絶望的になるだろう。ことは拓海ひとりだけの問題ではすまなかった。推薦した母校や、父の顔にも泥を塗ることになる。

「ダメだ……。ここを出たって、状況は何も変わりゃしないんだ……」

どうしてそう思うのか、自分で根拠も何もわからないが、きっとそうなるだろうという確信だけが胸に残った。

「結局……、卒業までじっと耐えるしかないのか……」

辿り着いた苦々しい結論に、拓海はまた目眩が強くなっていくのを感じていた。

＊　　＊　　＊

翌朝。拓海は縮こまるように気配を殺して教室に入った。途端に視線が一斉に集まり、陰口のようなヒソヒソ話が拓海の耳にも届く。そうなることはわかっていたが、だからといって学校を休むというわけにもいかなかった。

こんな時、全寮制というのはつくづく恨めしい、と拓海は思う。たとえ具合が悪くても、欠席には医務室での診断証明が必要で、ただ逃路をすればいいというものではなかった。どこにも逃げ場はない以上、事態をより悪化させないためにも出席せざるを得ない。自分の席が教室の隅にあるのが、せめてもの救いではあるだろうか。

席に腰を下ろすと、先に登校していたこはるが、拓海に気づく。小さくペコリと頭を下げてきたが、やはり気まずいのか、そのまま目を逸らしてしまう。当然だろう。拓海自身が蒔いた種だ。

今日はいよいよ味方なし。拓海は陰鬱な顔でため息をつき、憮に忍ばせていたポータブル音楽プレイヤーに繋いだイヤホンを耳につけた。むろん、見つかったら即没収である。

それでも、ヒソヒソ交わされる陰口に神経をすり減らすくらいなら、没収覚悟で好きな曲を聴いていたほうがマシだ。念のためにイヤホンのコードを手で隠し、拓海はプレイヤーのスイッチを入れた。大好きなインストゥルメンタルが聴こえてくると、ほんの少しだけモヤモヤが晴れてくれる。欲を言えば両耳で、もっと大音量で聴きたかったが、そのせいで見つかっては元もこもない。今の拓海は、なにげなく机に突っ伏すだけでも、どんな言いがかりをつけられるかわかったものではないのだ。

耳もとを掌で覆い、なるべく不自然にならないように空いている手で教科書を捲る。イヤホンを着けていない側の耳に周囲の声が届くものの、何を言っているのかまでは聞きとれない。自分の悪口を言われていたとしても、内容が聞きとれなければただのノイズだ。心が傷つくこともない。拓海はわずかに音量を上げ、音楽に意識を集中させた。

ほどなくして、風紀委員の久我友里子が静かに教室へ入ってくる。途端に、騒々しく談笑していたクラスの女子の間に緊張感が生まれた。クラスのリーダーである吉祥寺アリサが教室に入るのは毎朝遅い。先に友里子が教室へと入り、弛んだ雰囲気を引き締めるのが暗黙の了解のようになっていた。

「新庄さん、もう予鈴が鳴りますよ。早く席につきなさい」

まだ少し時間に余裕はあったが、まるで教師のごとき注意がクラスメートへと飛ぶ。その仕切りに反発する者は皆無で、自然と私語が減っていく。

「久我さん、今日はいつもより、ご機嫌斜めね」

「またアイツが問題を起こすからでしょ？　クラスの秩序が乱れるもの」

密やかな、それでいてどこか聞こえよがしな拓海への陰口。けれど、なぜか友里子は注意をしない。それもまた暗黙の了解なのだ。

拓海にしてみれば堪ったものではない。耐えがたいストレスに苛まれ、机の上に蹲るようにして頭をかかえ込んだ。もうすぐ、ホームルームが始まる。それまでの辛抱だ。

そうこうすると、毎朝恒例となる予鈴代わりのオルゴールの音色が校舎に流れ始めた。その直後であった。拓海はいきなり強い目眩に襲われ、一瞬意識が飛びそうになる。あるいは、それもまたストレスのせいなのか、とにかく頭がクラクラして気分が悪い。辛うじて、片耳につけたイヤホンから流れる音楽が、ぼやけた意識をもとに戻してくれる。

「ん……？」

なにげなく周囲を見渡した拓海は、教室を覆う奇妙な雰囲気に気がついた。

いつの間にか私語が完全に消え去っていた。拓海への陰口どころか、かすかなざわめきすらない。人の気配がいっきに希薄になったとさえ感じられる。見れば、クラスメート達は一斉に宙をぼんやりと見上げているではないか。

入学以来、初めて直面した状況に、拓海は戸惑うばかりだった。そこでふと、友里子がひとり無言で席を立つ。そのまま、ゆっくりと教室内を歩き、注意深くクラスメートの様子を確かめている。ただならぬ状況に、拓海は瞬時に明後日の方向へ顔を向け、ぼんやりしているふうを装った。皆と同じにしていなければ大変なことになる。そんな気がした。